

ぶらり

なんたん 15

くほんじ ~九品寺(大門、仁王像)~

朱塗りの門と仁王像が守り続ける平安

朱塗りの大門がひときわ目を引く、園部町船阪の鴨尾山九品寺。

弘仁元年(八一〇)、弘法大師の開基とされる九品寺は、平安時代の承暦三年(一〇七九)に白河天皇が自らの勅願寺として、再建されました。

この大門(仁王門)は三間一戸の楼門で、国の重要文化財に指定されています。門の両端には、市の文化財である仁王像が二体、寺に悪しきものを入れまいとにらみを利かせて構えています。口を開けた方が阿形「あぎょう」、固く



▲仁王像の阿(あ)形と吽(うん)形(市指定文化財)

結んだ方が吽形「うんぎょう」で、物事の始まりと終わりを表すともいわれています。門をくぐると、かつて七堂伽藍を擁したという広い境内が、日常の煩雑さを解き放ち、訪れる人々の心を平安へと導きません。四季の木々や花、風を感じながら、深く山水をたたえる坂道を登ると、数々の観音像が立ち並び、さらに階段を登った山上にどっしりとした本堂が姿を見せます。心のよりどころとされた九品寺は、時代の変遷を越えてなお仁王門に守られています。



▲九品寺大門(国指定重要文化財)

ぶらり案内



九品寺住職 芝 崇弘 さん

九品寺のご住職、芝 崇弘さんに話をお伺いしました。

「九品寺は、古い歴史のあるお寺で、遠くからも朱塗りの大門を見に訪れていただきます。私はこの地を、お寺として仏事のお付き合いのみではなく、どなたにとっても癒やされ、安らぎを感じていただける場所でありたいと思います」

とても落ち着いた雰囲気のある九品寺の境内は、自然と調和した手入れがされていました。毎年、7月の土用の丑(うし)の前日にはお祭りがあり、厄除けとして境内で配られるヒバの枝を求めて参拝者が訪れるそうです。

九品寺のお話

昔むかし、白河天皇の皇后さまが身ごもられたときのお話です。

安産を祈願し、名高いお坊さんにお祈りしてもらいましたが、産月になってもなかなか出産の兆しがありません。

皆が心配する中、はるか西方から金色の光が差し、不思議に思った白河天皇がその光を追うと、紫雲たなびく九品寺山上に三面千手観音像があったそうです。

白河天皇は、直ちにその地に立派な観音堂を建て、観音像を安置されたところ、皇后さまは無事、皇子を出産されました。大変喜ばれた白河天皇は、感謝の印に、阿弥陀堂をはじめ、七堂伽藍を建立されたそうです。

その後、戦火により当時の建物は焼失してしまいましたが、大門と呼ばれる仁王門が残り、かつての様子を守り伝えています。

参考文献「園部一〇一年記念誌」
ほか